

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 7 月 16 日	
所属部局・職	霊長類研究所（統合脳システム分野）・修士課程
氏名	田辺 創思

<b>1. 派遣国・場所</b>
京都府京都市
<b>2. 研究課題名</b>
第二回京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウム
<b>3. 派遣期間</b>
平成 26 年 7 月 12 日
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b>
京都大学
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b>
<p>京都賞は、科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に大きく貢献した方に授与される国際賞である。先端技術部門、基礎科学部門に加えて、思想・芸術部門の計三部門が用意され、各部門に毎年一人ずつ賞が授与される。京都賞シンポジウムは、京都賞が対象とする様々な分野の専門家が出会い、最先端の研究活動あるいは芸術活動の動向を社会に発信し、異分野間の対話の場を提供しようとするものである。</p> <p>今回の京都賞シンポジウムでは、エレクトロニクス分野から「最先端エレクトロニクス」、生物科学分野から「人類進化研究の最前線：遺伝子・化石・認知」、音楽分野から「音楽の 20 世紀、そして 21 世紀」の三つのプログラムが用意され、私は 12 日に行われた生物科学分野に参加した。</p> <p>生物科学分野で特記すべき事は、化石記録から情報を引き出す手段の一つとして、ゲノム解析が非常に大きな力を持ってきている、ということだろう。化石を収集し、それらの形態学的に解析する、という古典的な手法に加え、それらのゲノムを抽出し、解析することが可能になり始めている。さまざまな化石から抽出されたゲノム情報を比較しそれらを地理的情報と結びつけることで、人類が現在に至るまでにどのような進化、発展を遂げたかという歴史的な流れを、より具体的に描くことのできる時代になった。また、ゲノムを現代人や動物などと比較することで、何が現代のヒトをヒトたらしめたのか、という問いにも触れられた。</p> <p>これらの研究は、化石の収集からゲノムの解析、ものによっては遺伝学的な手法を用いて動物実験を行う必要もあるなど、非常に多岐にわたる分野を統合した研究となっている。このような包括的な研究が大きな力を持ち、主流になっていくことを考えると、いかにして学際的な研究を推進するか、まさに京都賞の理念の一つである異分野間の調和をいかにして実現するか、という大きな問題を突きつけられたような印象を持った。例えば、本シンポジウムで講演を行った Svante Pääbo 氏は、以前にヒトの言語に関する重要な遺伝子として FOXP2 を同定された。本シンポジウムではそれに関係した最新の知見を発表されたが、私は次のような問題を持った。すなわち、同様な研究によりヒトの言語に特徴的な遺伝子の候補は他にも数多く特定されており、それらすべてに対して同様な解析を試みることは非常に多くの時間と労力を費やしてしまうことになる。どのような遺伝子を優先的に解析していくか、あるいはより効率的な解析手法はないか、などといった問題は生理学や分子生物学を専門とした研究者との対話によってしか、十分な解決を望めない。異なる専門領域の研究への幅広い興味を持ち、個々の知識を総合化して新たな知的価値を創出する、という京都大学大学院理学研究科のアドミッション・ポリシーを思い出させるシンポジウムであった。</p>
<b>6. その他</b> （特記事項など）
写真撮影は禁止されていたため、本報告書には写真を載せていない。